広報ひこね 通巻第1252号
（平成23年9月15日発行）
発行：彦根市〒522-8501 滋賀県彦根市元町4番2号 ☎0749-22-1411(代) FAX 0749-22-1398
編集：情報政策課 ●1日・15日発行 彦根市ホームページ http://www.city.hikone.shiga.jp/

彦根市では、点字および音声版広報ひこね（編集版）を発行しています。問い合わせ先：㊐障害福祉課☎27-9981、FAX26-1767。また、外国語版（英語、中国語、ポルトガル語）の広報ひこね（編集版）も発行しています。問い合わせ先：㊐人権政策課☎30-6115、FAX24-8577

連載企画 －わたしの町の戦国 第15回－

甘呂城 －河瀬氏ゆかりの平地城館－

甘露庄

甘呂は犬上川の下流に位置し、西は野田沼に接しています。甘呂は古くは甘露とも書きました。京都の三千院に伝わる古文書には、正中2年（1325）の西南院新御堂領の1つとして「近江国甘露庄」と記されています。西南院は高野山の別格本山西南院のこと。当時、甘呂は西南院の新御堂の荘園でした。その後、甘呂の地は梶井門跡領の荘園として維持されたようです。

河瀬氏

この甘呂に、いつごろ城が築かれるようになったのか明確なことは不明ですが、『江州佐々木南北諸士帳』（佐々木一族が近江を支配した中世に、近江に存在した城名と城主名を列挙したもの）によると、「甘呂住佐々木随兵　河瀬大和守秀宗」と記されています。甘呂には佐々木一族の家臣であった河瀬大和守秀宗が住んでおり、この河瀬氏のもとで甘呂に城が築かれたのでしょう。河瀬氏は、もともと荘園の現地管理を委ねられた荘官であったと推測されますが、しだいに甘呂の地を本拠として城を築くようになったと考えられます。

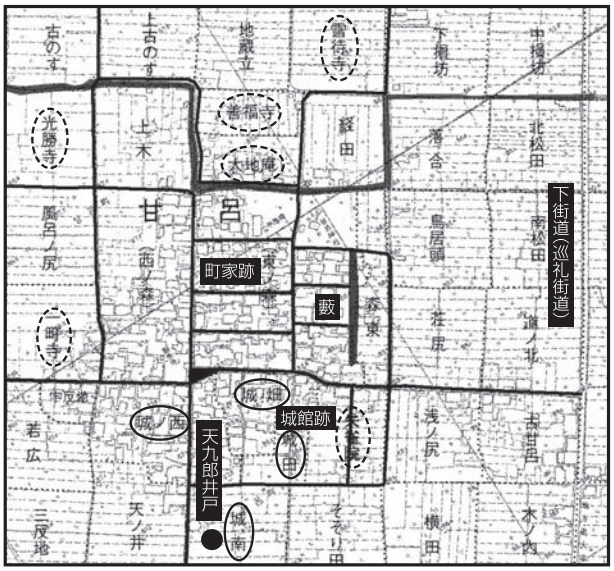
なお、『江州佐々木南北諸士帳』を見ると、河瀬氏の名は甘呂のほか北河瀬や多賀の地にも認めることができ、一族と考えられます。

甘呂城

では、甘呂のどの辺りに城が存在したのでしょう。その手がかりとしてまず地図を見てみましょう。地図を概観して最初に気づくのが、整然と碁盤の目に区画された土地です。この区画は、古代の土地区画制度である条里制地割で、1町（約109m）四方を基本単位としており、これを「坪」と称しました。坪には、それぞれ小字名が与えられていますが、小字名にはその土地の歴史を秘めたものが少なくありません。

そこで、小字名に留意しながら甘呂の集落に注目すると、集落の南端に「城畑」「城田」「城南」「城ノ西」といった小字名が集中しています（地図中の実線の丸で囲んでいるところ）。「城畑」「城田」の辺りを中心に、かつて河瀬氏ゆかりの平地城館が広がっていたと推測されます。

さらに、現在の集落の中心付近は坪の地割をさらに南北に二分するように走る直線的な道路や水路が設けられ、間口を等しくする計画的な屋敷割となっています。規模はそれほど大きくありませんが、この辺りに町屋が形成されていた可能性が考えられます。



▲甘呂地図

そして、集落の周囲には現存する甘呂神社のほか、「雪待寺」「善福寺」「大地庵」「光勝寺」「一町寺」「朱雀院」など社寺にちなんだ小字名が存在しています（地図中の破線の丸で囲んでいるところ）。

また、甘呂神社の南方に存在した細長い敷は、城を取り囲んでいた土塁の一部であり、甘呂神社の北方に現在も流れを刻む水路は、堀の役割を担っていた可能性も考えられます。

これらを整理すると、甘呂集落の南端付近に城館を構え、その北に町屋を形成し、周囲には社寺を点在させ土塁や堀で囲った城の姿を想定することができるように思います。

甘呂の地は、すぐ東南側を直進する下街道（古代の巡礼街道）が走っており、戦国時代には下街道に面して佐和山城や安土城・八幡山城などの城が築かれ、幾多の武将が往来しました。甘呂城も規模は小さいですが、下街道沿いの重要な位置に築かれた城と言えるでしょう。

なお、小字「城南」の地には天九郎井戸と呼ばれる井戸が残っています。甘呂に住んだ刀工の天九郎俊長ゆかりの井戸と伝えています。

問い合わせ先 ㊐教育委員会文化財課☎26-5833番、FAX26-5899番、Eメール：bunkazai@mx.hikone.ed.jp

VEGETABLE OIL INK
▶「広報ひこね」は大豆油インキを包含した植物油インキを使用しています。
▶廃棄する場合には古紙回収に出してください。
▶この「広報ひこね」は48,960部作成し、1部当たりの単価は7円（1円未満切り捨て）です。ただし、原稿作成・編集などにかかる職員の人件費は含まれていません。